

# クラーク室内管弦楽団 第31回演奏会

【クラーク室内管弦楽団創立10周年記念演奏会】

“クラーク会館のクリスマス”

2013年12月25日(水) 19:15 開演

北海道大学クラーク会館講堂

入場無料

プログラム

A. コレツリ (1653-1713) (生誕360年, 没後300年記念)  
合奏協奏曲第8番ト短調 Op. 6-8 「クリスマス協奏曲」

E. フンパーデュンク (1854-1921)  
歌劇「ヘンゼルとグレーテル」序曲

L. v. ベートーベン (1770-1827)  
交響曲第1番ハ長調 Op. 21

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ：011-706-6595  
(工学研究院・フロンティア化学教育研究センター 下川部雅英)

## プログラム・ノート

当団は北大教職員の親睦団体の1つとして立ち上げ、コツコツと活動を続けてまいりましたが、多くの方々のご協力のおかげで、10周年を迎えることができました。立派なパイプオルガンとチェンバロを常備しているという恵まれた環境のクラーク会館講堂を本拠地として、大学内に生の音楽が定期的に鳴り響くという文化に微力ながら貢献することができていれば幸いに存じます。

今日は、クリスマス。にわかクリスチャン(?)が多い日本でも、一年を締めくくる時期としてなにか特別な気分になる季節でもあります。バロック時代の典型的な合奏形態として、合奏協奏曲(Concerto Grosso)というものがあります。近現代のクラシック音楽の世界では、協奏曲といえば、一人のソリストが大オーケストラをバックにというイメージが強いかもしれませんが、当時は小さな編成の合奏隊で、複数の名人が同時に腕前を披露するというこの形態が一般的だったようです。今日は、二本のバイオリンと一本のチェロがソロを受け持ち、それを小さな弦楽合奏とチェンバロが支える、という編成で、コレッリの**合奏協奏曲第8番ト短調「クリスマス協奏曲」**を最初に演奏します。ゆったりとした部分(明るい調性)と軽快な部分(暗い調性)が交互に出てきます。冬の静かな雪の降る情景が目浮かぶ部分もあるかもしれません。最後は田園風のさわやかな音楽で曲を綴じます。暖かな暖炉の前でたたずむ家族の様子でしょうか。皆さんの脳裏どのような風景が浮かぶでしょうか。

本日2曲目は、フンパーデュック作曲の歌劇「ヘンデルとグレーテル」の序曲です。ドイツの静かな森の情景、子どもたちが迷い込んだ不思議な魔法の世界、そして知恵と勇気ある姉弟の冒険は、家族との再会というハッピーエンドに繋がります。家族再会というテーマも、クリスマスの時期にふさわしいかも知れません。

西洋クラシック音楽の歴史の中で、貴族や教会に雇われていた楽士が、市民社会の台頭とともに、一般市民に向けた曲を書き、大規模な演奏会を行うようになり始めたのは、18世紀の半ばを過ぎてからと考えられます。ドイツ語圏であるオーストリアの首都ウィーンでもオペラは音楽先進国のイタリア語で書かれていました。モーツァルトの『フィガロの結婚』(1786年)もイタリア語によるものです(一般市民にはなじみが薄いものであったでしょう)。しかし、晩年の『魔笛』(1791年)はドイツ語でかかれ、社会全体が大きく動いていく様子が反映されていると考えることができます(フランス革命は1789年)。本日最後に演奏するベートーベンの**交響曲第1番ハ長調 op. 21**は、上記のような時代の雰囲気の中で書かれたもので(1800年)、古典派以降の交響曲音楽の「原点」といえるかもしれません。ベートーベンの後期の作品のような強い個性はまだ多くありませんが、市民社会のための音楽の原点ともいえるベートーベンらしさが、すでに感じられる作品となっています。クリスマスの夜に、北大のクラーク会館で、どのようなベートーベンが響くでしょうか。お楽しみいただければ、幸いです。

(メディア・コミュニケーション研究院 奥 聡)